

pen

with New Attitude

8
2006



職人という仕事。

21世紀のマイスター像を考える。

どこで飲むか、なにを飲むか
夏の夜、ラムを二杯。

あくなき職人のパッションが、 世界に1つのエレガントな傘を生む。



「私にはこの傘作りが面白いかどうかはわからない。傘の仕事しかしたことがないから」とタラリコさん。



工房兼店 (Via due porte a toreda 4b Napoli)。近くにもう1つ店がある (Via Toreda 329 Napoli)。



桜の木を柄に使った、ストライプの傘。329ユーロ。傘の生地は上質なシルクで、発色が鮮やかだ。



優雅なカーブを描く独特の骨組みが際立つ、美しいシンプルな傘。329ユーロ。柄は栗の木の間。



傘の柄に使われるのは桜の木や、ハシバミ、栗の木の間、栗などの動物の角。約30種類の素材がある。



左連の息子のピエロさん(左)、ルカさん(中)を後継者として育て、いまは3人で傘を作っている。

ナポリにある、小さな傘の工房。ここで作られるのは普通の傘ではない。マリネッラやルビナッチなどの高級紳士服店に並び、世界中にファンをもつ。ある人は、「こんな手紙を送った。『この傘に合うような、人間になりたい』。生き方までも動かす、特別な傘——それがマリオ・タラリコさんの傘だ。

12歳で初めて作った傘に、父が5リラをくれた。

「24歳の工房で、私たち兄弟は傘の生地の切れ端で作ったクッションに寝かされて育った。12歳のとき、両親を手に伝いたくて初めて傘を作った。父が褒めてくれて5リラをくれたんだ」
それから今日まで、タラリコさんは、63年間ずっと傘を作り続けている。

タラリコ・ブランドの歴史は1860年に遡る。祖父のアキッレ・タラリコが王族のために鎧甲や動物の牙を使って、扇子や傘を作っていたのが始まりだ。3代目になるマリオ・タラリコさんもほぼハンドメイドで作る。傘の縁のまつりから柄縁のようなボタンホールまで、すべて手縫いだ。

工房にはタラリコさんのほか、ルカさんとピエロさんが働く。布を張るのはピエロさん、生地を調整し、干すのはルカさんが行う。タラリコさんは傘の柄を作り、骨を組むところまで、とりわけ難しいのが、柄を彫る作業だ。

桜の木や栗の間、鹿の角などを手彫りで、掘りやすく美しい形に仕上げる。特に木の根は吸く苦労するようだ。

タラリコさんが最もこだわっていることは何だろう。尋ねたら「日本の傘を手渡された。握ってみると……」

「アッと感ずるものがないかい？」
これまでにさしてきた傘とまったく違う。この柄はなぜこんなに、するりと手に馴染むのだろう。軽さ、バランス、細部の仕上げ、とすべてが揃って実にエレガントなのだ。

「傘はハーモニー。バランスと持った時のフィーリングが大切なんだよ」
タラリコさんは言う。「あなたは世界一の傘職人になれるわという妻の言葉を励みに、毎日作ってきた。クリスマスも休まずにね。職人とはパッション。職人である。か、職人でない。か、そのどちらかしかない。無償の努力ができて、とても自分らしい人なんだ。私は努力できる職人を尊敬するよ」

いまや著名な詩人や政治家が顧客に名を連ね、賞状の手紙が届く。しかしタラリコさんにとっては、まだまだ「作りたいう傘がたくさんあって、夢にまで見る。女性用の細い柄の繊細な傘、それからアンティークの柄を使ったもの。2〜3年のうちに絶対に作るよ」

1人の職人の純粋なパッションが惜しげなく注ぎ込まれている。晴れていても、持ち歩きたい傘だ。

Mario Talarico

1931年ナポリ生まれ。1980年頃、祖父のアキッレに始まり、父ジョバンニが継いだタラリコ・ブランドの傘の3代目。タラリコさんの傘は、サイト www.mariotalarico.com のほか、パーニーズ ニューヨーク 銀座店などでも一部を購入できる。

new
meisters
of 21st century



70代の老舗職人、職人には
なりました。お客さんには
職に引き継ぐつもりです。今
でも、お客さんには、お客さん